

<研究紹介>

男性アイドルを推す男性ファンのまなざし —マイノリティのファンにとっての抑圧と承認—

The Gaze of Male Fans Supporting Male Idols: Oppression and Acceptance in a Minority Fandom

小埜功貴*

Koki Ono

I. 「推しはだれ？」という問いはコンプライアンス違反ではないのか？

教員として大学に勤めていると学生に対して個人的な情報について詮索したり尋ねたりしてはならない、いわゆる“コンプライアンスの遵守”を常に意識しておく必要がある。親睦を深めるために「彼氏／彼女はいるの？」や「実家はどこか宗教に入ってるの？」といった個人のプライベートに関する発言は、大学に限らず権力関係の発生する職場や学校全体として NG とされる。

しかし、昨今の多くの大学では“推し活”ブームに乗じて文化社会学やカルチュラル・スタディーズを土台にしたポピュラーカルチャー論が学生人気を集めたり、〇〇学×推し活といった「学際」的な講義が散見される。これらの講義などで最初のつかみとして尋ねられるのが、「推しはだれ？」という問いだ。

筆者の研究対象であり、筆者もまた当事者（アカデミック・ファン）でもある男性ジャニーズファン[†]にとってこの質問は「彼女いるの？」よりもプライベートな部分を突く問いであり、回答に戸惑ったり、いまは特に問題ないけど過去に躊躇った経験をしてきた男性ファンも多い。なぜ性的指向にふれるのは NG なのに趣味嗜好について尋ねられるのは平気なのか。とても不思議に思えてくる。

—男なのに男のアイドルを推してるなんて珍しいね。

筆者がこれまで行ってきた男性ジャニーズファンに関する研究は、この逆説を成り立たせる社会に蔓延る性規範、そして、この逆説を超えて同性のアイドルを愛好するファンこそが享受できるエンパワーメントに、多くの男性が抱える「生きづらさ」への処方箋が含まれているのだと確信して研究してきた。

* 名古屋短期大学

† 現在、「ジャニーズ」という名称は公には使用されていない。周知の通り、「株式会社ジャニーズ事務所」の代表取締役を務めていたジャニー喜多川が生前に所属するアイドルおよびオーディション等へ訪れた男児・男性たちに性加害を行っていたことが事実認定されたことで、ジャニーズは廃業となり、アイドルプロデュースは別会社である「株式会社 STARTO ENTERTAINMENT」へ継承されたという経緯によるものだ。ただし、2026 年現在において、かつて使用されてきた「ジャニーズファン」や「ジャニオタ」といった当該事務所のアイドルたちを応援するファンを包括的に指す呼称が存在しないということや、会社としての実体は失われていても STARTO ENTERTAINMENT へ移ったアイドルたちを指して「ジャニーズ」と総称することは多くの人々にみられることではあるため、人口に膾炙した表現という事情も鑑みて、本稿では「ジャニーズ」という語を用いる。

Ⅱ. 日常生活では隠蔽される「男らしくなさ」への承認：「男性ジャニーズファンによる「非男性性」の承認実践について—支配／従属からの脱構築」

たとえば男性のバンドグループに対して“同性＝男性のファンが憧れる”という事例は多くみられる。その一方、女性ファンを多く有する男性アイドルを愛好する男性ファンという比較的散見されることのないこの存在の特異点とは一体何か。それは、同性としての男性ファンが男性アイドルに対して「かわいい」と言うことだ。

“idol”とは偶像であり、偶像であるということは祈られる対象（アイドル）であって、その一方で祈るひとたち（ファン）がいる。人間たらしめる要素は言語で、フェルディナン・ド・ソシュールはその言語を“差異の体系”であると喝破する。祈る／祈られるという人間間の差異を決定づけるのは主観に訴えかける美しさ¹⁾。特に日本においては“もののあはれ”、つまり未成熟で不完全な「かわいい」が日本生まれのアイドルには重要だ。この系譜は稚児寵愛に溢れていた日本の男色文化をはじめ、成長物語に価値を見出す能や歌舞伎、宝塚などの日本芸能からも見出される。ジャニーズもその例に漏れず、ステージ上のパフォーマンスでアイドルがカッコよく決めたとしても、ステージから降りた平場では「男らしさ」からかけ離れた言動や行動が多くの女性ファンから「かわいい」と評価される。

男性ファンもまた女性ファンと同様に男性アイドル同士間の親密な関係性や、アイドル個人の言動や行動をみることで「かわいい」を見出す。「かわいい」という承認の言葉は、同じ性を生きる自身の“非男性性”への承認にも繋がる。非男性性とは、「規範的な男性性に該当しない脆弱性を承認する、男性性における支配／従属のヘゲモニー的な二元論から脱構築された男性アイデンティティ」（小埜 2023：174）と拙稿では定義づけている²⁾。つまり、いわゆる「男らしさ」には^{あら}非^{あら}ずの規範外へ開放された余事象として名付けた概念であるが、敢えて類似概念を当てはめるのだとすれば、明治以降の少年雑誌にみられる弱さを否認する男性性を表すウィークネス・フォビアのウィークネス³⁾や、ユングの提唱する男性の内に存在する異性性を示すアニマ⁴⁾が近いところだ。非男性性というのは必ずしも女性性を意味する二元論的概念ではないが、言語上で認知するにあたって筆者が調査したインフォーマントらは「女」と表現していたり、自身の男性性に帯びる規範性を否定し、自己定義された「男」を生活しているのだとも言及されていた。

この非男性性の承認実践のあり方について自身の女性的側面から男性アイドルを対象とする「女性性からのまなざしを介した非男性性の承認」と、男性アイドルに内在する女性的部分を対象とした男性としての自身を主体とする「女性性へのまなざしを介した非男性性の承認」がある。男性間で「かわいい」と言い合う姿というのは日常生活のなかであまりみられないが、その原因は女性性とも換言できる非男性性を開陳することで男性性の正当性および両者間の優劣関係をより明確に成立させてしまうからだといえる。男性としての憧れでもあるアイドルでさえも非男性性を有していて、それが多くの女性ファンから「かわいい」と愛しまれる文化圏というのは、男性ジャニーズファンにとって、自身の非男性性が劣等としてみなされず、むしろ当然の存在だ

とみなせる理想郷なのである。

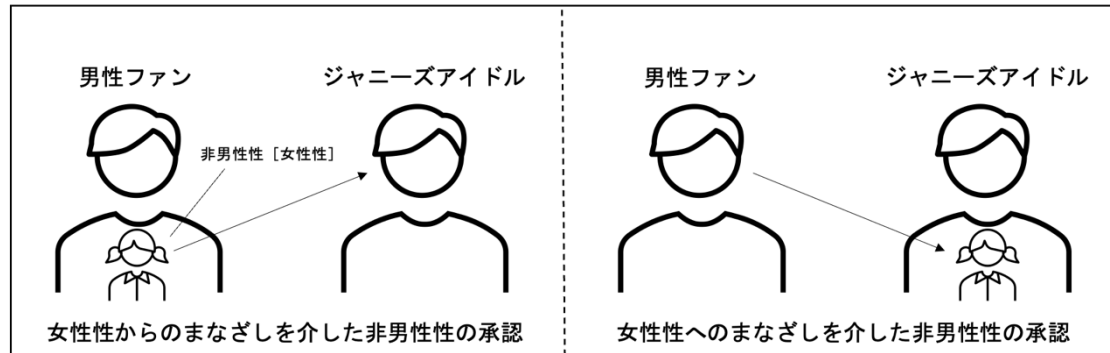


図 1 男性ジャニーズファンによる女性性を介した非男性性の承認実践（筆者作成）

Ⅲ. フィクションとトラブルに遭う男たち：「女性向け趣味領域における男性ファンの被抑圧性をめぐる理論分析—男性ジャニーズファンの事例を中心に」

こんにちにおいて女性アイドルを女性が推すというのは決して珍しくなく、特に K-POP においては女性ファンの存在が男性よりも目立つ。その一方で、男性アイドルを推している男性ファ

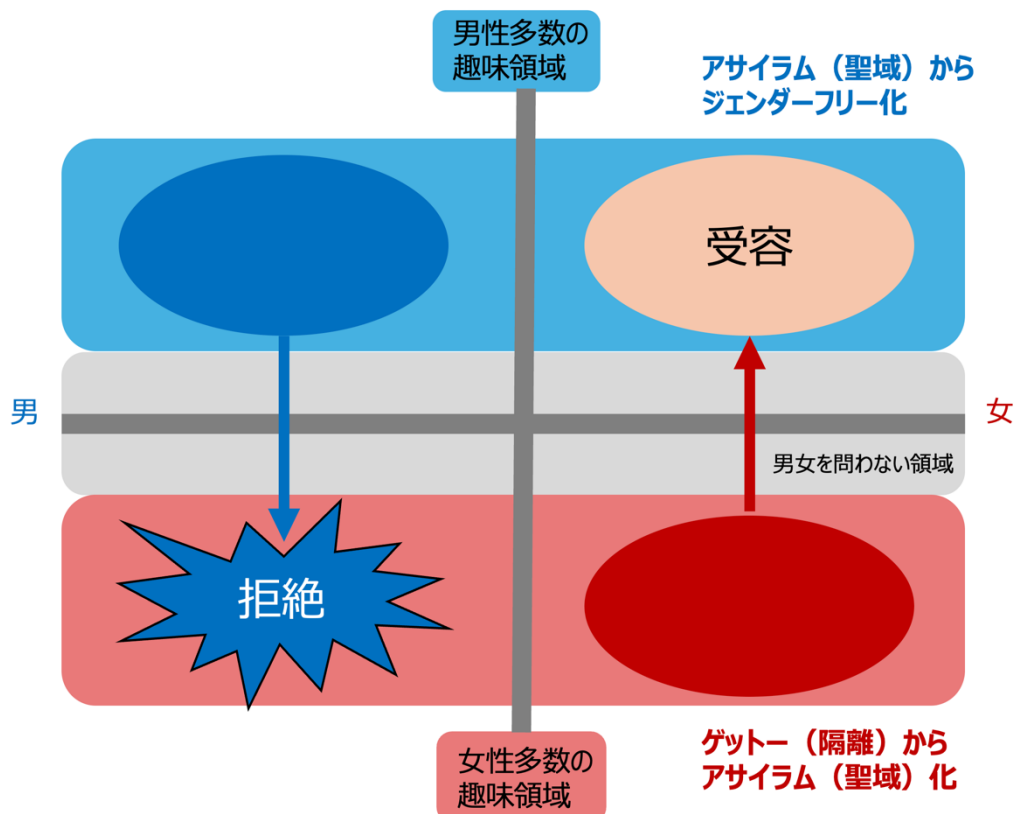


図 2 ジェンダー化された趣味領域への越境難易度についての非対称性（筆者作成）

ンというのは比率的に極めて低い。同性ファンの割合における非対称性の原因について、かつて「男性向け」とみなされた男性が多数を占めていた男性領域がジェンダー平等などの社会的情勢によってジェンダーフリー化された一方で、かつてまた「女性向け」と——場合によっては強制的に——みなされた女性領域というのが男子禁制のアサイラム化された[‡]ことが背景として挙げられる。

図2では、特定の趣味に興じる主体の性別を横軸に据え、縦軸は、男性が多数を占める領域が「男性多数の趣味領域」、女性が多数を占める領域が「女性多数の趣味領域」と設定している。男性領域にいる男性たちと女性領域にいる女性たちはそれぞれマジョリティとして存在するが、主体の女性が男性領域へ越境した場合、その男性領域というのは多くの場合ジェンダーフリー化されていることから、基本的には越境する女性たちは受容される傾向にある[§]。その一方で、男性が女性領域とされる趣味に興じるとなると、その女性ファンから拒絶を喰らったり、第三者的な立ち位置にある男性たちからの疎外が発生しやすい。この非対称性について、とりわけ男性が女性領域へ越境することの困難さについて論じたのが「女性向け趣味領域における男性ファンの被抑圧性をめぐる理論分析——男性ジャニーズファンの事例を中心に」である[§]。

拙稿では男性ジャニーズファンを対象に、彼らの存在を嘲笑的に面白おかしく取り上げている週刊誌や「LINE オープンチャット」という匿名掲示板的なコミュニティにて男性ファン同士で繰り広げられた会話を事例としてあげている。筆者もまた経験を有することがある。2014年くらいにTwitterでジャニーズファン同士のオフ会があることを知る。当時はジャニーズのことで話せる友人がいなかった筆者は主催者へ参加表明を送る。すぐに快諾の返事もらったのだが、後日の連絡にて「女性同士で安心してハッチャけたい」と話す女性参加者が数名いたということで男性である筆者は参加を拒否されたのだ。また、高校入学時においては「え、おまえ男のくせにジャニーズ好きなの？ホモなの？」と事実と異なる決めつけを差し向けられた経験がある。このような差別的経験について他の男性ファンも実際に被ったかどうかはひとによりけりではあるが、少なくとも男性ファンたちにとって「肩身の狭さ」というものが感じられるのである。

この「肩身の狭さ」が発生する力学について拙稿ではマジョリティ層としての女性ファンからの疎外感と、ジャニーズのファンではない男性からの差別感という二つの視点から分析を行っている。女性ファンからは、男性ファンの存在を明確に排除しているということではなく、間接的に疎外することで「自分は仲間外れにあっていてのではないか」と思わせる「緩い排除」^⑥を男性ファンは感じてしまう。その背景として、実際に経験しているわけではないが、きっと女性は自身（男性）の存在を疎ましいと感じているのだろうという思い込みを与える「フィクションとしての女性の目」⁷⁻⁹⁾が作用することで彼らはファン文化圏のなかで「肩身の狭さ」を感じてい

[‡] 紙幅の関係で女性多数の趣味領域におけるゲッター（隔離）からアサイラム（聖域）化の力学についての詳述は省略する。

[§] 「カープ女子」に代表される広島カープを応援する女性や、「UMAJO」と呼ばれる競馬を愛好する女性といった形で、商業的な働きかけによってかつて男性多数だった領域へ女性ファンを取り込むということが多く実施されている。

るのである。一方、男性からのまなざしについては、女性が好むものとされているジャニーズという、異性に向けているとされてる男性アイドルを同性である男性が愛好することの理解され難さが存在する。ジェンダー分野において有名な議論であるジュディス・バトラーによる「ジェンダー・トラブル」というのは、男性的とされていたある特定領域に女性が侵入することで、彼女たちは予期しない行為体（エージェンシー）としてみなされ、男性的とみなされるためには対象である女性という存在に依存しなければならないという事実が突きつけられることによって、男の自律性が幻想であることが暴かれるというものだ¹⁰⁾。男性ジャニーズファンはこの構図の“逆”を行っていて、つまり、主体（とされている）側の男性が、対象側である女性の趣味領域へ越境することで、男性によって「男」という自律性が乱されるジェンダートラブルを引き起こすのである。男性の規範性についてピエール・ブルデューは「男らしさとは（中略）女性的なもの、何よりも自己自身のなかの女性的なものに対する一種の恐怖のなかで構築されている観念」であると同時に、「男性化（ないし脱女性化）の作業は、ひきつづき、市場への最初の入場という、男性の世界、面目と象徴的闘争の世界への参入の機会におこなわれる」（ブルデュー1998=2017: 45, 80）と指摘する¹¹⁾。女性的なものを秘匿化させないことには男として認められない男性間の評価体系を「象徴的暴力」とブルデューは名付けているが、筆者の表現を用いれば「非男性性」が男同士の間で承認されないことで、劣位に陥らないように強くあり続ける競争関係が常に存在しているといえる。

以上を問題として捉え、解放の志向先として提唱するのであれば、この女性的な要素や非男性性についての承認が男性間で積極的に行われることによって、いわゆる男性の「生きづらさ」問題について一定程度の改善がみられるように思う。筆者はその改善への希望として「かわいい」の評価を男性たちにも許可されることだと提唱しているが、その効用としてあるのが、男性でも全員が有する非男性性がありのままに承認されるということである。

IV. 自分を封じ込めることなく、男を生きるために

筆者がこれまでに行ってきた男性ジャニーズファンについての研究では、男性アイドルを愛好するファン文化圏の内実を明らかにするのみならず、この文化圏のなかではマイノリティへ位置づけられる男性たちの「肩身の狭さ」という事象から、これまでの男性学がとらえてきたような男性の「生きづらさ」をはじめとする男性問題へ接続され得る力学について説明してきた。男性学の先駆けとなる市民運動および思想を指すメンズリブ（男性解放）という「男らしさ」に関する男性同士の対話実践において、しばしば「〈男らしさ〉からの解放」という視点に注目されがちで、解放が目指す先としての「〈自分らしさ〉への解放」という視点がスローガン程度に収まってしまい、その内実について言語化されることはそう多くなかった。後者における具体的な実践として男性ジャニーズファンによる非男性性の承認実践があり、男性にも「かわいい」の評価体系が拡張されていくことが要であることを提唱してきた。そのため、筆者が男性ジャニーズファンを対象とする研究を行っている動機の根本には、男性学が捉えてきた男性問題や解放を具体的に精緻化させ、還元させたいという希望があることを申しておきたい。

『被抑圧者の教育学』で有名なパウロ・フレイレによると、抑圧／被抑圧の構造を意識的に捉えることができるのは被抑圧者のみであり、その一方で抑圧側にいるひとたちの間ではそういった構造は潜在化されてしまうことを指摘する（フレイレ 1970=2018）^{**12)}。すなわち、抑圧を被る傾向にあるマイノリティ層だからこそ着想され得る研究テーマがあると確信している。

昨今、ライブ会場内でのファン同士によるチケットの転売や、SNS 上におけるタレントへの誹謗中傷といった不正行為が散見される。実際に行っているかどうかは別として、ジャニーズの女性ファンに話を聞くと“もしお金に余裕があるのであれば、ライブで良い（＝近い）席をとるためにルールを破ってでも取引をしてしまうかもしれない”と言及されることが多い。一方で、男性ジャニーズファンは“そもそも推しのアイドルに近づくのも烏滸がましいと感じるのに、ルールを破って近い席に行くのは冒涇だと思ってしまう”と、（一部の）女性ファンとの間でアイドルに対する態度の違いがしばしば見受けられる。この差異を捉えるにあたって、まずはアイドルとファンの関係性についての歴史の変遷をとらえていく必要があるだろう。筆者は日本におけるアイドルオーディション番組の歴史について調査をするなかで、審査方法の変遷から以下のような図式を挙げている。

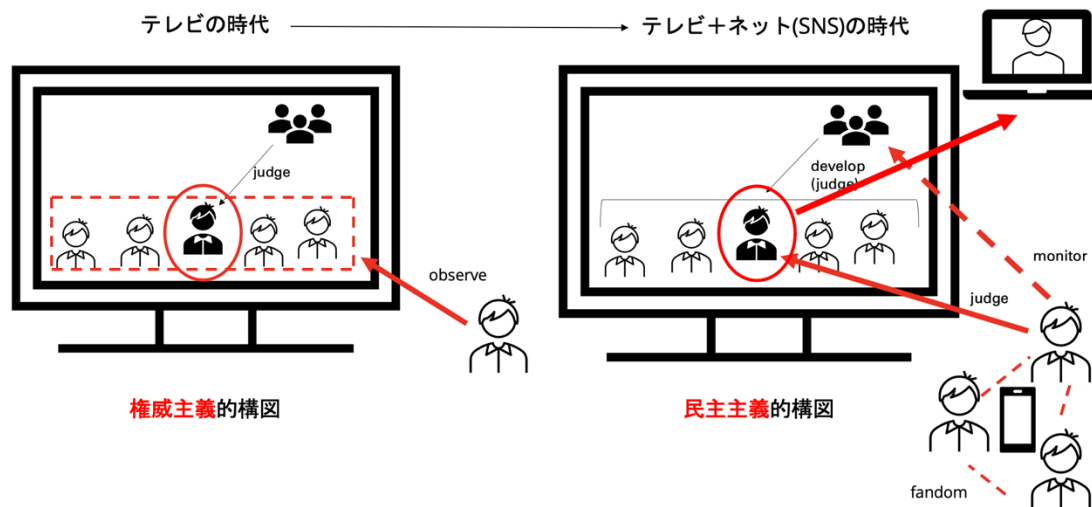


図 3 アイドルオーディション番組の審査方法についての変遷（筆者作成）

アイドルが X（旧 Twitter）や YouTube 等の SNS へ進出することが当たり前となった昨今、かつてまで茶の間にあるテレビに映るアイドルを家族や友人と一緒に見ていたのに対して、いま

^{**} 具体的には、「解放のために自分たちが闘わねばならないのだ、という被抑圧者たちの確信は、変革の指導者によって与えられるものではなく、自分の意識下によってもたらされるもの」（フレイレ 2018：13）と言及している。また、男性ジャニーズファンにおいては決して女性ファンから抑圧されているというよりも、男性ファン自身が思い込んでしまっ

は1人1台持っているスマホを通じて、1人で日常的にアイドルをまなざすことが多くなった。オーディション番組においても、かつてはレコード会社の上層部といった明らかな権力者が一般の少年少女を審査し、その模様をファン（視聴者）たちはただ観察するということが当たり前だった。しかし、いまではファンにも投票権が与えられ、宣伝活動さえもファンが行うことも珍しくなくなり、ファンの権威性は確実に上がっている。これが意味することは、ファンの利他性が相対的に低くなり、一方で利己性が上昇するということだ。

ファンの文化圏が変わりゆくなかで、その文化圏の主体であるマジョリティ層にとっては無自覚・無意識的にその変化を体験する一方、変化に適応および迎合できない、またはしづらと思うマイノリティ層としての男性ファンだからこそ敏感に変化を認知することができる。筆者は引き続き、ファン文化におけるマイノリティとしての男性ファンに注目することで、男性学へ還元され得る特異的な承認および被抑圧について分析を行うと同時に、マイノリティのファンであるからこそ、そのファン文化圏のなかでは当然視される実践や変化を捉えていきたい。

文献

1. 中森明夫, 2023, 『TRY48』新潮社.
2. 小埜功貴, 2023, 「男性ジャニーズファンによる「非男性性」の承認実践について：支配／従属からの脱構築」『コモンズ』2: 153-180.
3. 内田雅克, 2010, 『大日本帝国の「少年」と「男性性」——少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」』明石書店.
4. Jung, Carl, 1981, *Archetypes and the Collective Unconscious*, Princeton: Bollingen Foundation (林道義訳, 1999, 『元型論〈増補改訂版〉』紀伊國屋出版.)
5. 小埜功貴, 2024, 「女性向け趣味領域における男性ファンの被抑圧性をめぐる理論分析——男性ジャニーズファンの事例を中心に」『日本ジェンダー研究』27: 129-143.
6. 西井開, 2021, 『「非モテ」からはじめる男性学』集英社新書.
7. 須永史生, 1999, 『ハゲを生きる 外見と男らしさの社会学』勁草書房.
8. 澁谷知美, 2018, 「仮性包茎手術を正当化する言説の 1970-90 年代における変容——「医療化された男らしさ」概念を手がかりにして——」『人文自然科学論集』142: 87-113.
9. 澁谷知美, 2021, 『日本の包茎 男の体の 200 年史』筑摩書房.
10. Butler, Judith, 1990, *GENDER TROUBLE: Feminism and the Subversion of Identity*, London: Routledge, Chapman & Hall, Inc. (竹村和子訳, [1999] 2018, 『ジェンダートラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
11. Bourdieu, Pierre, 1998, *La Domination Masculine*, Paris: Seuil (坂本さやか・坂本浩也訳, 2017, 『男性支配』藤原書店.)
12. Freire, Paulo, 1970, *Pedagogia do Oprimido*, Paze Terra. (三砂ちづる訳, 2018, 『被抑圧者の教育学 50 周年記念版』亜紀書房.)

